

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊 35 年目 **Nr. 402**

2023年7&8月号

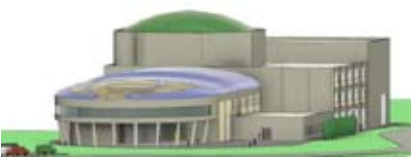


杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

135

廃止措置が進められている「もんじゅ」のサイトを活用した新たな試験研究炉の建設計画が具体化している。日本原子力研究開発機構（原子力機構）は六月二日、文科省の作業部会会合で新試験研究炉の検討状況について説明した。熱出力一〇MW級の中性子ビーム炉を基本案とする概念設計、敷地内の建設候補地における地質調査の進捗状況の他、新試験研究炉が主目的とする中性子利用に関し、「中性子小角散乱装置」、「中性子イメージング装置」など、幅広い産業利用に供する四つのビーム実験装置の設置に係る検討結果を紹介し、「最優先で設置し、新試験研究炉の存在意義のアピールが重要」とした。同機構の新試験研究炉推進室長の和田茂氏は、「最先端の利用をいかに実現するのか、最先端の研究をいかに地元貢献に展開するのか、これらに留意しつつ、関連コミュニティを巻き込んで活動を行う」と強調している。

新試験研究炉の着工・運転開始時期は未定だが、現在概念設計を終え、許認可に向けて二〇二二年度より詳細設計段階に入ったところだ。原子力機構では、設置許可申請の見込み時期を二〇二四年中に提示する予定。作業部会の委員からは、今後の設計・運営に向け、産業界のニーズ、人材育成・技術継承における役割、学生や異分野に向けた啓発を考慮する必要性があげられたほか、規制対応や商業炉との対比との関連で、それぞれ「グレーデッドアプローチ」（分類したリスクに応じ最適な安全対策を講じていく考え）による審査の合理化、メンテナンススケジュールのあり方についても意見が交わされた。



新試験研究炉のイメージ（原子力機構発表資料より）
https://www.jaif.or.jp/journal/japan/18188.html



原子力機構、京大、福井大は新試験研究炉の設置に向け5月8日に協力協定を締結（福井大にて、左から福井大・上田学長、京大・湊総長、原子力機構・小口理事長、原子力機構発表資料より）

同作業部会は二〇二〇年に、新試験研究炉の炉型として、京大研究炉「KUR」の後継、幅広い学術分野での利用や産業界への発展が見込まれることなどから、中出力炉（熱出力一〇MW未満程度）を「最も適切」とみて設計を進めていく考え方を示し、中核的機関として、原子力機構（試験研究炉の設計・設置・運転）、京都大学（幅広い利用運営）、福井大学（地元関係機関との連携構築）を選定した。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に關係する偉大な作家（その三）を紹介したい。エルフリーデ・イエリネクは、一九四六年にシュタイヤーマルク州ミュルツツシューラク郡に生まれた。父はユダヤ・チェコ系の化学者、母はウィーンのルーマニア系富裕層出身でカトリックであった。ギムナジウム時代の六歳よりウィーン市立音楽院に通い、パイクオルガン、ピアノ、リコーダーのちに作曲を学ぶ。ウィーン大学で美術史と演劇学を専攻し、在学中の六七年に詩集を出版。同年大学を中退し作家活動を開始する。他方音楽学校での勉強は続けており、七一年にオルガン奏者国家試験に合格している。イエリネクの活動は小説、劇作、エッセイ、翻訳、ラジオドラマや映画のシナリオなど多岐に渡る。七四年から九一年まで共産党に入党しており、初期にはマルクス主義の観点からの搾取批判と文明批判的な作品が多かったが、後に父権性社会や自国オーストリアの硬直した因習性社会に対する糾弾に重点を移していった。一方で過激な性描写や辛辣な自国批判などからオーストリアの保守団体からはポルノ作家などとして非難に曝されることも多いが、男性による性の支配的暴力性を文体的に異化しつつ、その家長制的欺瞞性を告発している。九八年のゲオルク・ビュヒナー賞受賞をはじめ多数の文学賞を受賞し国際的にも評価が高く、八三年の小説作品『ピアニスト』はミヒャエル・ハネケによって映画化され二〇〇一年のカンヌ国際映画祭でグランプリに選ばれている。ポスト・モダンな作風かつ作品を通じた政治的な意思表明が評価されて、二〇〇四年にフランツ・カフカ賞とノーベル文学賞とをダブル受賞した。

一方、大岡昇平は、一九〇九年に東京市牛込区（現新宿区）新小川町に生まれた。父は兜町で株式仲買店

に勤め、仕事の関係で家庭の経済状況に浮き沈みがあり、都内での転居を繰り返した。大岡は読書が好きで、八歳ころから「立川文庫」や「日本少年」などを愛読し、一九年「赤い鳥」に童謡『赤リボン』を投稿して入選。二二年青山学院中学部に入學、キリスト教の感化を受け、将来は牧師になろうとしたが、聖書購入をめぐって父と対立したことや夏目漱石に惹かれたことで信仰心は薄らいでゆく。その後は、芥川龍之介やゲーテなどの文学や西田幾多郎の哲学書、マルクスなどの著書を読むようになる。二九年、成城高等学校を卒業し京都帝国大学文学部文学科入学後は、河上徹太郎や中原中也らと同人雑誌「白痴群」を創刊。三年に京都帝国大学を卒業し、三年ころから、スタンダールへの傾倒を深める。四四年、教育召集で東部第二部隊に入隊後、七月にフィリピンのマニラに到着、ミンドロ島警備のため暗号手としてサンホセに赴く。四五年一月、マリリアでこん睡状態に陥っていた所、米軍の捕虜になりレイテ島タクロバンの俘虜病院に收容され、二月に帰国。四九年に『俘虜記』により横光利一賞を受賞し、作家の地位を確立した。『武蔵野夫人』（五〇年）などの恋愛小説の秀作も書くが、その目は一貫して戦争に向けられていた。七一年、芸術院会員に推されたが、俘虜の経験を理由に辞退。『レイテ戦記』（七一年）などの戦記文学を書き続け、昭和の終焉を前に死去。戦記小説家、フランス文学翻訳家以外にも、歴史小説家、推理小説家としても著名。没後の八九年、『小説家夏目漱石』により読売文学賞を受賞している。



余談であるが、イエリネクがノーベル文学賞を受賞した二〇〇四年は筆者がウィーンに赴任した年であり、現地では大きな話題となったことを覚えている。大岡昇平は『武蔵野夫人』『レイテ戦記』などを少々読んだ。今月も両市に関連する偉大な作家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、

余談であるが、イエリネクがノーベル文学賞を受賞した二〇〇四年は筆者がウィーンに赴任した年であり、現地では大きな話題となったことを覚えている。大岡昇平は『武蔵野夫人』『レイテ戦記』などを少々読んだ。今月も両市に関連する偉大な作家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、

余談であるが、イエリネクがノーベル文学賞を受賞した二〇〇四年は筆者がウィーンに赴任した年であり、現地では大きな話題となったことを覚えている。大岡昇平は『武蔵野夫人』『レイテ戦記』などを少々読んだ。今月も両市に関連する偉大な作家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、



Foto: APA/ROLAND SCHLAGER



杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長